永島福太郎録
麑嶋戰記
後編
五号
加賀貝吉板

A445
5

永島福太郎録
永島孟斎画

繪本 鹿兒嶋戰記

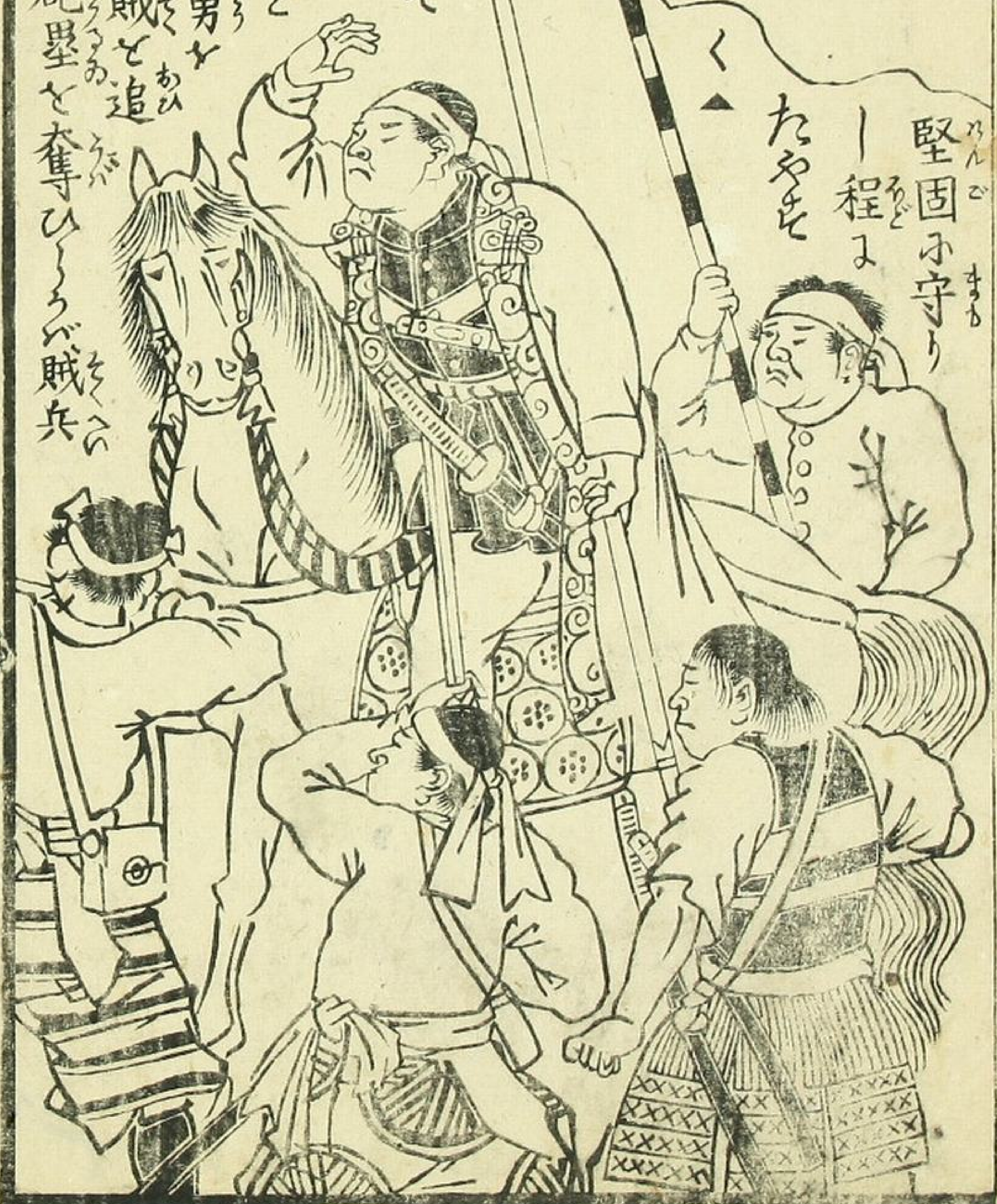
東京 青盛堂板

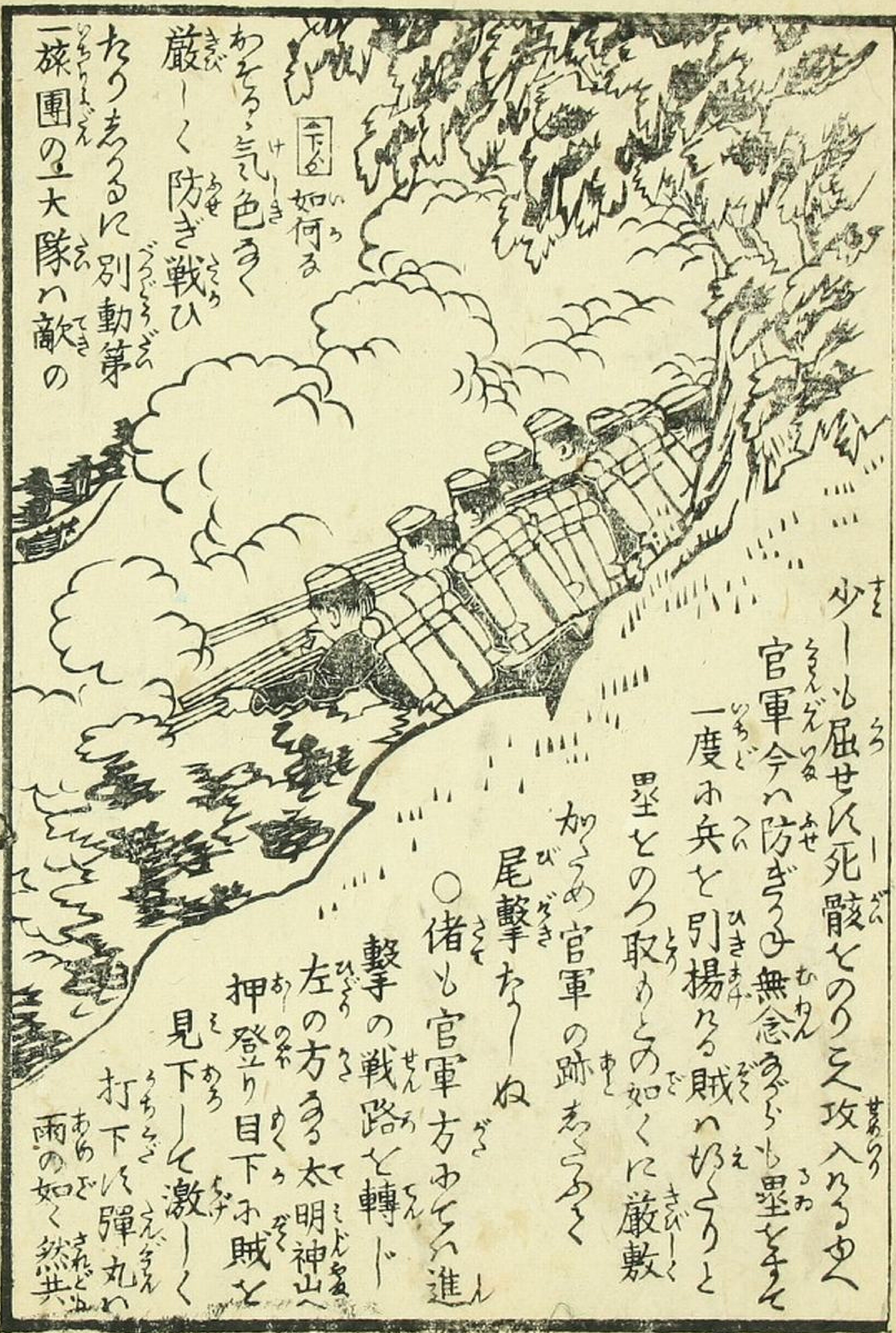
48-7901

堅固に守り
し程に
たやすく
く▲

▲抜く
事叶はずして
暫時さゝ
えたりしかれど
官軍必死の勇を
ふるひ漸く賊を追
立て遂に砲塁を奪ひしかば賊兵

伊敷を過て敗走なす途中二中隊なる
新手の援兵に出會しかば是に機を得て
二本松へ取てかへし官軍の守る砲塁へ
烈風の如く押寄せ大小銃連発し
無二無三に攻立る
官軍の方にても
折角奪ぬるし
砲塁をとられ
賊にとられじと防戦
時をうつせ
ど敵の
勢ひ破竹の
如く撃ども突ども





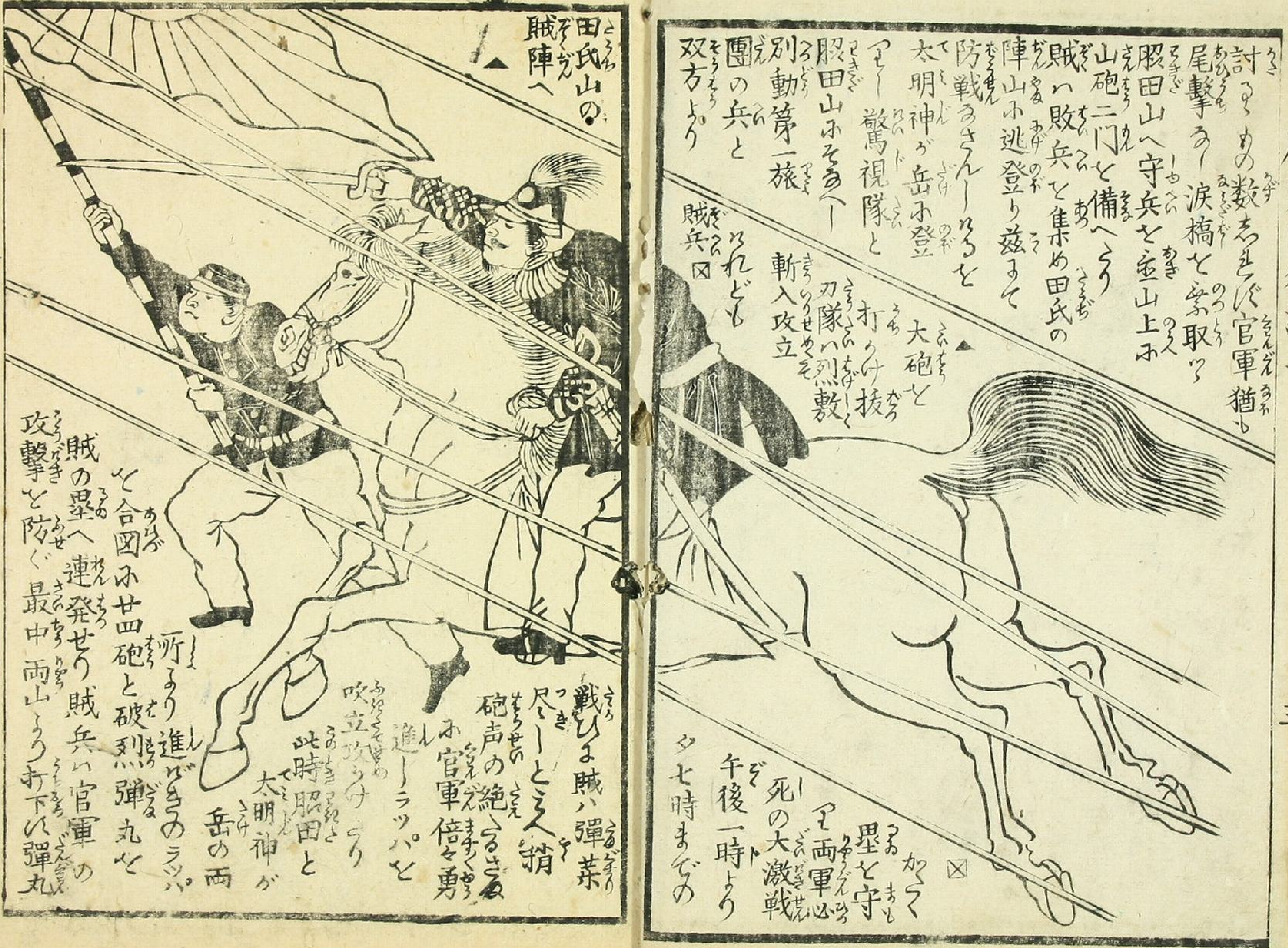
少しも屈せず死骸をのり越攻入るゆへ
官軍今ハ防ぎ得ず無念ながらも塁をすて
一度に兵を引揚る賊ハ得たりと
塁をのり取もとの如くに厳敷
加ゝめ官軍の跡を志たふて
尾撃なしぬ
○偖も官軍方にて進
撃の戦路を轉じ
左の方なる太明神山へ
押登り目下に賊を
見下して激しく
打下す弾丸ハ
雨の如く然共

▲下◎如何なる
おそるゝ気色なく
厳しく防ぎ戦ひ
たりけるに別動第
一旅團の二大隊ハ敵の

脊後を撃んと社寮蓬
莱の二艦にのり組端舟を
以て谷山沖より上陸し
谷山をめぐりて敵の脊
後へ押出しどろと計り
に鬨をつくり不意よ
発つて砲撃せし
かバ賊ハ思ハぬ
不意をうけ
且前後より
攻立られ
賊軍狼狽
騒ぐ処を◐

◐官軍ハ
機に乗じ
大小砲を
うちかけ
煙の中
より
抜刀隊
おめきさけんで斬込バ
賊兵散々に敗走し

ひるまぬ
賊の剽
悍
▲上へ



討るゝめの数もまたバ官軍猶も尾撃なし涙橋を乗取り照田山へ守兵を並山上に山砲二門を備へたり賊ハ敗兵を集め田氏の陣山に逃登り茲にて防戦なさんとしけるを太明神が岳に登りし驚視隊と照田山にそなへし別動第一旅團の兵と双方より▲大砲と打かけ抜刀隊ハ烈敷斬入攻立されども

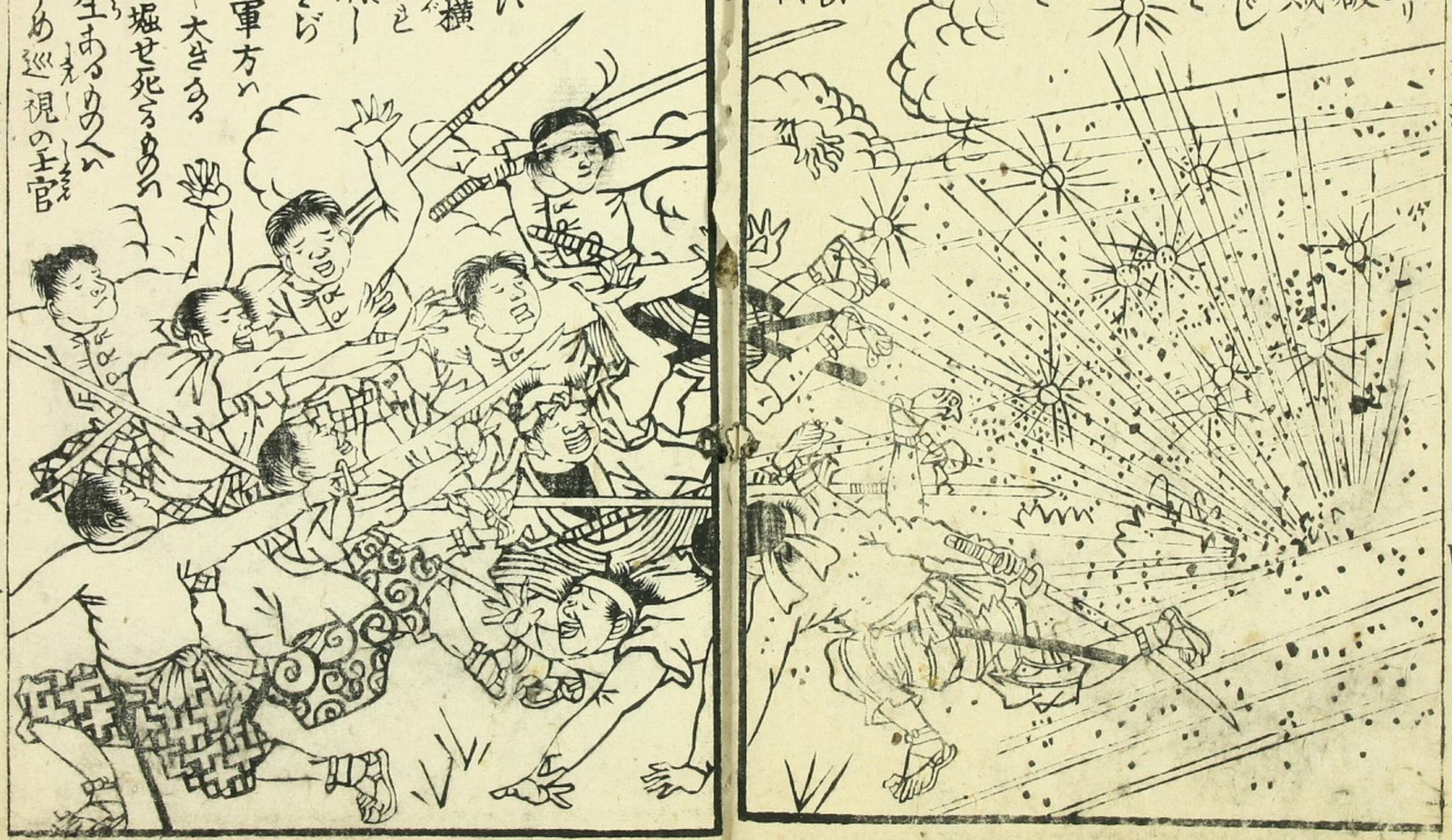
賊兵図

かくて塁を守りて両軍必死の大激戦ぞ午後一時より夕七時までの☒

▲田氏山の賊陣へ

戦ひ果て賊ハ弾薬尽しとえへ銷砲声の絶るさへ官軍倍々勇進しラッパを吹立攻かけたり此時照田と太明神が岳の両所より進撃のラッパを合図に廿四砲と破烈弾丸を賊の塁へ連発せり賊兵ハ官軍の攻撃を防ぐ最中両山より打下ル弾丸

塁中に落下り此処彼処に破烈なすにぞ賊の死傷おびたゞしく惣敗軍となりたるを官軍尾撃して諸塁を乗とり総軍各所に屯集せり此日の戦ひは近来の大戦なりしと官軍の死傷二百余名賊の死傷数知れず此所彼所に横倒り鮮血流れて道路を滴し秋ならぬもみぢをちらしぬ官軍方は人夫に命じ大きなる穴を諸所に掘せ死たるものはこれに埋め生あるものへは薬用なさしめ巡視の士官



鹿児島戦後編五

四

方に奔走なす中に四等巡査山田収も巡視として出張しそこここと見廻るに賊の死がい算を乱し目も大樹の下刀を杖に死するもありて目もあてられぬ有さまなり山田は独り先に立小坂なる

小溝の橋をわたるをりから橋のたもとに倒れ伏たる一人の賊兵突然とむくり起あがり薩摩武士の捨がまり大太刀抜もち山田を目がけ朱塵にまみれつつ切付る腕におぼえの山田収サーベルにて受とめる又切付る電光石火上一下四五々夾々時も夜明の

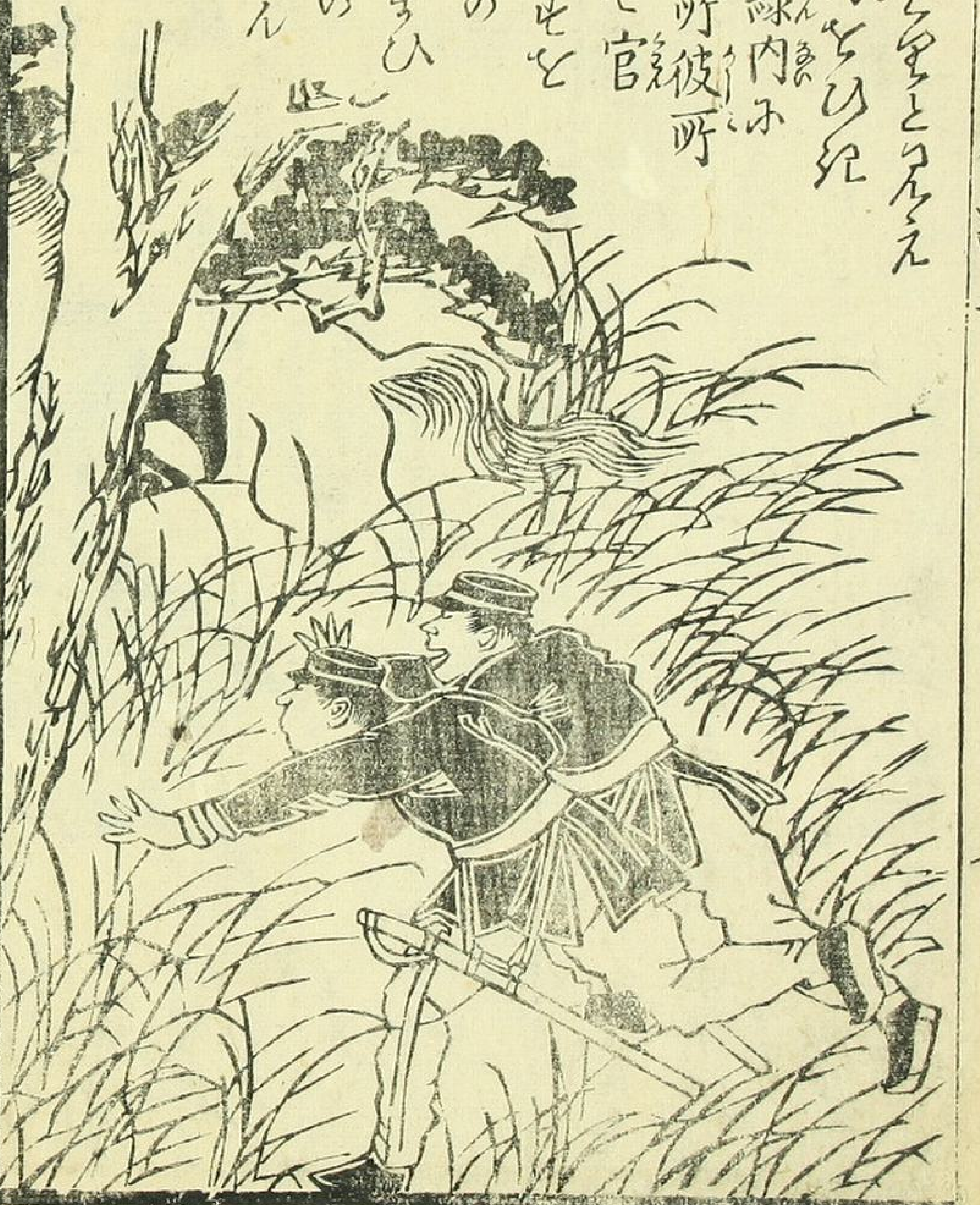
朝あらしに砂石を飛し樹間よりさし昇る朝日の蔭ハ白刃に
映じて目もくらめくばかり勇士と勇士の一騎討賊兵いかに猛しと
いへども身體数ヶ所手を負ければ
勢力つきて山田が斬らむサアベル
を受そんじてタヂくく木の
根へ跌き倒るる処を
おこしも立ず組しきて
早縄かけんと
するところに力の
あるむを剣へし
山田の匕首と老くて突と
更にもせばしそ捻合つ
少時勝負もつかざる

図一手ハ人吉と援て直ちに日向路に

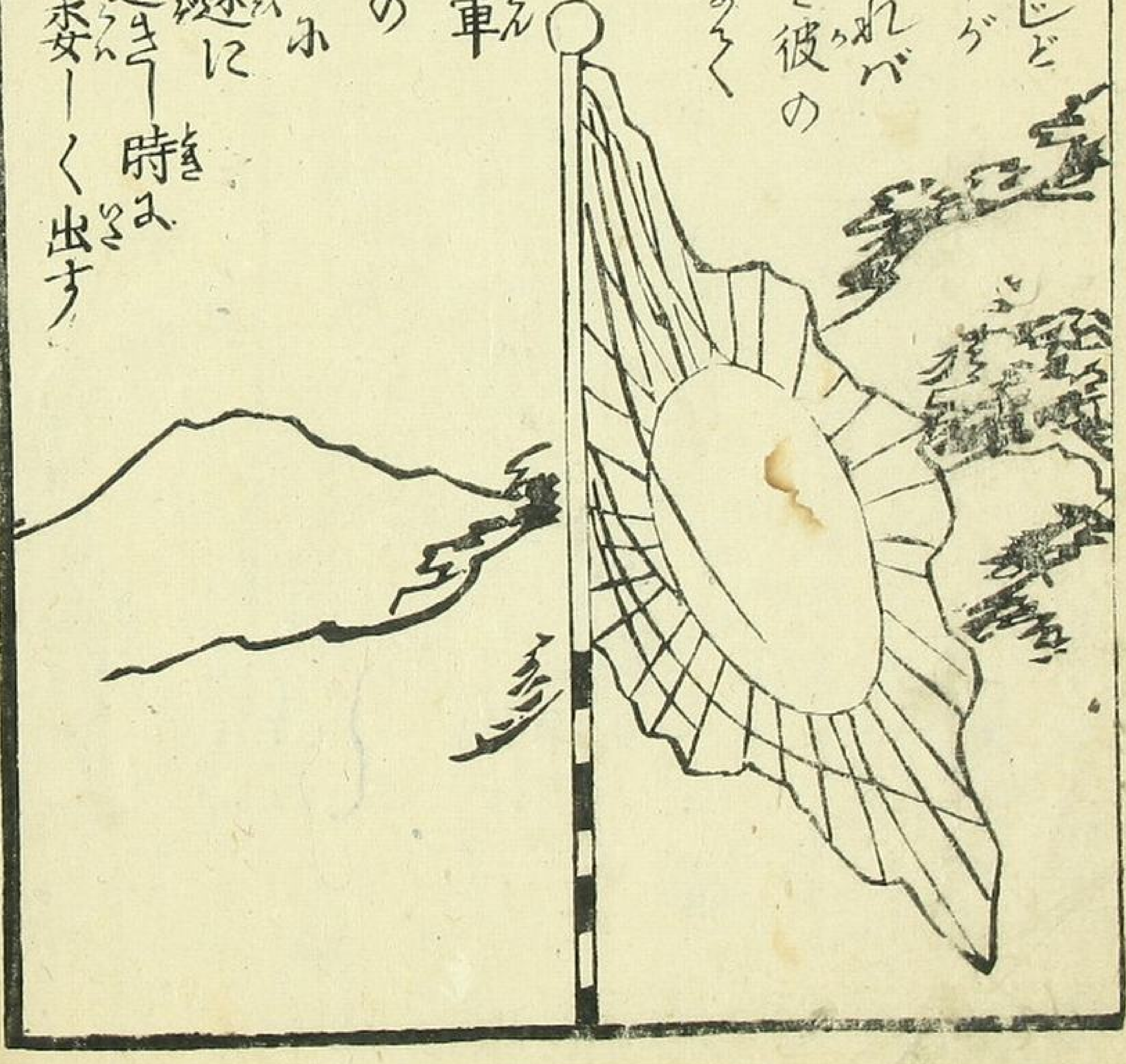
とりかかり巡査あまたきたり山田を
救助遂に賊
と捕縛すし
其姓名を
尋問ありしに
▲
▲鹿児島彰義隊の
副隊長佐摛堅治と名
のりし事人本営へ
送り山田の疵を
手当なりしぬ
此時山田の働きを
賞せぬものは
あらざりる
○茲に山田少将の図

くりこえ吉田加久藤
の要路よ
そ且く
哨兵線と
設る
そうろう
六月三十日
近々の
農民が
米とくを運輸

せうしめどもとりそえ二頭の馬をひき官軍の線内に立いり此所彼所徘徊して官軍のようすを伺ふその怪敷ふるまひあしや賊の間者ならんも計りがたしと巡羅の士



官見認めつゝ捕へて糺問せんと従ふ兵士に目くばせせしが兵士はこゝろえ早足に走つゞく▲

▲曲者まてと留め近よれども二人の者はおどろきあわてゝ是はかなわじと逸足いだし山道づたひに馬を牽く雲かすみと逃ちてくれ走せ

なくと兵士ハこれと遁さじと
手分をなして追かけしが
彼等ハ地理をよく知られバ
行方志れずなりにけり彼の
二人ハ賊方の探索人なるべく
此日官軍の守備
強弱を探偵ふ来り
しあのぞとふ翌日賊軍
未明を犯して官軍の
ゑゐ越の塁場へ不意ふ
おし寄せたるふ官軍遂に
利を失ひ一度此処を退きし時ふ
去ふ迄より其ハ又次ふ委しく出す